The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	錦光山の輸出事業について
Author(s)	上村, 友子
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

錦光山の輸出事業について

上村友子　京都工芸繊維大学

錦光山宗兵衛７代（1867–1927，以後錦光山７代）は近代京都粟田口を代表する製陶業者の一人である。累代陶磁器を生業としており，錦光山７代も京焼の進行に寄与したが，明治期の大量輸出に伴う粗製乱造によって粟田焼衰退を招いた人物として紹介されることが多い。

錦光山７代は家業として歴史ある大きな窯元を引き継いだため製陶業者としての存在感が強いが，その名前は並業して行っていた貿易業の中でも多く見られる。

明治後期，日本陶磁器の輸出先は西欧から次第に北米へ変化し，輸出額が大きく膨れ上がった。錦光山７代は海外貿易を行う上で，組織や手順，輸出方法，関税に至るまで手探りの中，需要者の嗜好と購買力を調査し，常に京焼全体の振興策に目を向けていた。大正６年には外国貿易業者の団体である京都貿易協会が設立され，推薦によって初代会長に就任し，終身これを務めることとなる。

同協会からは『明治以降京都貿易史』[1] が出版され，今日における近代貿易史研究の一助となっている。また近年では遺族である錦光山和雄氏によって錦光山宗兵衛６代及び７代を取り上げた『京都粟田焼窯元錦光山宗兵衛伝 ── 世界に雄飛した京薩摩の光芒を求めて』[2] が上梓され，粟田焼終焉時の核心に迫る内容が示された。しかし，これらは当時の京焼の状況と錦光山７代の言説を取りまとめたものであって，貿易不振に陥り事業と作風の模索が行われた，明治以降の錦光山の作品を考察上での詳細な説明がなされていない。このため現在も錦光山７代の事業に関して貿易業に基づいた作品変化の総合的な捉え方はなされていない。

本研究では輸出陶器の販売が行き詰まり始めた明治後半，特に明治33（1900）年のパリ万国博覧会前後の日本製輸出陶磁器の動向を概観し，主に錦光山７代の貿易に関する言説を確認した。

１章，貿易業から見た錦光山

⑴　商工分業の提唱

錦光山７代は輸出で商店の規模を拡大する中，貿易商館を通していながら自らもあらゆる商業団体に深く関与していたため，貿易事業が家業である製陶業を逼迫する状況も起こっていた。『工業之大日本８（11)』[3] では，製陶者が販路の開拓に従事していては真の発展をすることは難しいということを述べ，商工の分業を提唱している。また，錦光山７代は貿易や商業，製陶に関する団体のほかに，意匠研究団体などにも参加しており，その嘱託の多さから多忙ぶりがうかがえる。当初は輸出によって家業である製陶業を維持拡大させることが目標であったと思われるが，貿易業との並業により各種商業団体の重役を担うこととなり，図らずも業務の重心が徐々に製陶業から貿易業に移っていったと考えられる。

⑵　問題意識の変化

大日本窯業協会[4] より発行された『大日本窯業協会雑誌』[5] は日本で初めての窯業に関する情報を網羅した協会誌である。この協会誌の中で錦光山７代が談義した内容を掲載した記事は２件見出すことができる。ひとつめ

の「聖路易博覧會陶磁器出品について」（1904年13巻146号）では日本陶磁器が輸出貿易についてこれからどのような製品作りを行うべきかに重心をおいた内容が語られており，ふたつめの「雑報」（1925年33巻386号）では主に京都内における陶磁器を製造する体制の変化を取り上げ，共同仕入れによって京焼全体の品質の均一化を図ることなどについて述べている。この２件の記事からは，錦光山７代の京焼に対する問題意識と視点の変化を読み取ることができる。20世紀はじめ，錦光山７代は海外の状況を注意深く観察した結果から日本の輸出陶磁器業界は各窯で陶磁器のデザインに注力し，輸出する対象国に対してどのような製品作りを心がけるべきなのか問う視点で京焼を見つめていたが，次第に京焼全体を一つの事業として捉え，地域生産品としてその振興策を講じようとする視点に変化していた。

２章，国際見本市への参加　海外輸出の場を見極める

⑴　国内および国外への最期の出品

錦光山７代の国内における出品記録は現在確認されている限り大正12（1923）年の第11回農商務省図案及応用作品展（農展）が国内最後の出品記録である。

錦光山７代の没後以降，錦光山商店として輸出を継続した錦光山８代は製陶業と貿易業の二業を続け，その出品の場を万国博覧会から，より輸出貿易に適した国際見本市に変化させた。錦光山商店は昭和２年以降から９年に至るまで，全部で11の国際見本市に積極的に作品を出品しているが，一方でこの時，錦光山の製造工場での製造は停止しており，活動は販売を中心としていた。結果として，錦光山商店は製陶業と貿易業の二業を続け，７代から８代に変わって少ししたのち，最後は貿易業によって幕を閉じたということができる。

これらのことから家業である製陶業を貿易業によって拡大した錦光山７代は，その並業を続ける中で見えてきた問題点を元に開国後の混乱期に商工分業を提唱しつつ，京焼全体の隆盛を目指した。その活動は結果として作品発表の場を万国博覧会からより輸出貿易の性質が強い国際見本市へ移す道筋を作り，貿易業の側面で大きな足跡を残したことを明らかにした。

注

1　京都貿易協会『明治以降京都貿易史』京都貿易協会 1963年

2　錦光山和雄『京都粟田焼窯元錦光山宗兵衛伝－世界に雄飛した京薩摩の光芒を求めて』開拓社 2018年

3　工業之大日本社『工業之大日本８（11）』工業之大日本社 1911年

4　会頭を品川弥二郎，評議員に中澤岩太，河原徳立，藤江永孝と言った陶磁器業界をリードした研究者と実業家が集結した会。会員には宮川香山らをはじめとした近代窯業界を代表する陶工も数多く参加していた。

5　明治25（1892）年９月より昭和22（1946）年まで，毎月一回継続して刊行された。昭和19年に７回，20年１回，21年４回欠号が出たが，その後も内容を一部他誌に分離しながら『窯業協会雑誌』，『窯業協会誌』，『日本セラミックス協会学術論文誌』と母体である協会の変化に伴って名称を変え，現在にいたって後続誌が刊行されている。